

第5回リハエ ミライ・アッセンブリー参加報告

岩崎 航太

北海道科学大学 保健医療学部 義肢装具学科

令和6年能登半島地震被災地へのリハビリテーション工学支援がどのように行われてきたか、その活動報告に参加した印象について述べる。現地の実際やそこでの活動、そして用いられた機材や道具、アイデアについて報告された。

地震により水道や電気をはじめとしたあらゆるインフラ、ライフラインが使用不可能となる。そうすると、健常者よりも電氣的な動力を必要とする福祉用具を利用した生活を行っている人に、より大きい影響が生じる。具体的には自らトイレに行けない場合に用いられる自動排泄処理装置などが挙げられる。福祉用具は、要介護者が自らの力で自立した生活を送れるように支援する一方、電気が通じなければ即時に使えなくなるものも多くある。

多くの人が集まる、とりわけ高齢者が集まる介護施設にも地震の影響は大きく及んだ。例として石川県珠洲市にある長寿園が挙げられた。1月1日であったこと、職員は出勤しようにも道路の寸断などによりたどりつけないことにより職員は少ない。そのうえ施設利用者に加え近隣住民が避難したため、施設内の人数は平時よりも多く、混乱を招いたようであった。今回の報告会で長寿園の被災当時の様子が動画サイトにアップロードされているとの紹介があったので調べてみると、想像以上のものだった。

はじめに、活動報告を受けて個人的に何ができるかを考えたい。まず考えられるのは、個人的な備えである。これも活動報告において紹介されていたが、やはり個人単位での備えが大切であると考え。紹介されていたものとしては、手のひら大のポーチに納めることが可能な、100円ショップで揃えられる防災

グッズだ。マスクやウェットティッシュなどの防災に特化したものではないものが多く挙げられていた。小さくまとめられるので、日頃から持ち運ぶにも負担になりづらく、災害時でなくても便利なものが多い。しかし、このようなものでも災害時には大いに役立つ。マスクは粉塵から身を守るのに有効であるし、ウェットティッシュがあれば断水下においても限定的ではあるが手指の清潔を保つことができる。その他の物質的な備えとしては、もう少し大きなもの、つまり一般に3日分必要とされている水や食料の準備であろう。これに関しては首相官邸ホームページをはじめとした各所に備蓄リストが公開されているため割愛する。

次に、物質ではない心構えのようなものについて考えたい。この活動報告を受けて、私は災害の凄惨さを感じた。しかし、これまでも様々な災害があり、被害があり、あらゆるところで報告・報道されてきた。その度に凄惨さというのは感じてきたはずである。しかし、私の準備はおよそ不足しているとしか評価できないものだと考える。だから今回で、凄惨に感じるだけなのは終わりにしたい。そのように感じたことを記憶にしっかりとどめ、自らの身に及ぶ可能性がいつでもどこでもあるものとしていたい。災害が起きれば備蓄もとい買い溜めが今でも起きる。私は北海道に住んでいるため、2018年の北海道胆振東部地震の際には食料品を扱う店の奥の棚がカラになったのを思い返した。そして、その時抱いた違和感も思い返した。事態が起きてから対症的に準備するのでは遅い。あくまで予防的に動かなければいけない。

考えるのは簡単であるが、実行するのは難しい。何事もない日常の中で災害という凄惨さを思い出し準備するのは楽しいことではない。しかし、起きてから効果を成すのは日頃の準備と学びだけであることを、活動報告によって考えることができた。この思いをわすれず、来る災害に備えていきたい。

北海道科学大学 保健医療学部 義肢装具学科
〒006-8585 札幌市手稲区前田7条15-4-1